



日本キリスト教団  
**三軒茶屋教会**  
<http://sanchurch.jp/>

# 三軒茶屋 教会通り

第45号 2012年8月発行

〒154-0024  
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5  
TEL/FAX: 03-3418-4933  
発行：三軒茶屋教会 広報部

「もう礼拝に出席できそうにありません」。そのような声を聞く時があります。

高齢のため、施設などへの転居のため、怪我や体調不良のため、または特別な事情のため、礼拝に出席できなくなる方々が実際にいます。その声には落胆と無念の思いが込められています。清々しさが伝わってくるのは稀です。

長年にわたり馴染んできた土地や環境から、自分の意図に反して離れなければならぬのは、確かに寂しくまた辛いものです。大切な人生の一部を失ってしまったような気持ちになります。

そうした人々の思いを心に留めながら礼拝に出席するのが今や異例ではなくなっています。事情があつて教会の礼拝から離れている方々が少なからず存在する。この現実には、他人事ではありません。

中には転居の後、教会からの連絡が届かなくなり、音信が途絶えて久しい方々もいます。中にはすでに天に召されている方もいるかもしれません。

そうした方々に教会はどう寄り添っていったらよいのか。難しい課題です。

## 「その日が来る前に」

牧師 伊藤英志

幸いなのは、牧師が交代したとしても、また礼拝出席が適わなくなつたとしても、信仰の友との交わりを大切に保とうとしておられる方々もおられることです。

電話や便りで連絡を取り合つて、「いつでも話せるあの人」がいる時、その人の幸いは個人の幸いに留まらず、教会にとつての幸いともなります。

日本基督教団信仰告白の後半部分の使徒信条にある「聖徒の交はりも信ず」という文言は、この幸いをも

含んでいます。教会にとつて幸いとなることは、天にある幸いに深く太く結び付いているからです。

先日ある方からホスピスに入所されたご親戚の最後について伺いました。息を引き取る際に、「クリスマスの讃美歌「きよしこのよる」を何も見ずに大きな声で歌い上げられたそうです。驚き、また大いに感激したとのことでした。

それを見届けた方々は、キリスト教信仰の有無に関わらず、一人の人の真に麗しい最期を体験したといえ

ましよう。

その人の死をも用いて、遺された人々の命に生ける水を注いでくださる。この聖なる御業が、私たちの間に起こり得ます。

誰にでも必ず「その日」が訪れます。その時になつて何を思い起こし、何を遺し、伝えようとするのか。その思いは、礼拝に出席できる間にどれだけその聖なる時間を重んじてきたかにかかっているでありましょう。たとえ過去を再び思い出すのが難しい現実に置かれたとしても、その



人の霊には決して消えない恵みが証印として伴っています。人の霊は、神のみがその全貌を把握しているの

です。

「もう礼拝に出席できそうにないかもしれない」。その言葉が現実のものとなつた時こそ、喜びと誇りに満ちた思いに至りたいのです。感謝と覚悟をもって「定めの時」に向かう気概を整えておきたいのです。

今日も礼拝に出席できる恵み。それは、たとえ礼拝に出席できなくなった日を経ても、なお続く信仰の歩みを清々しく進んでいくための、大いなる恵みであるのです。